

スピリチュアリティの 興隆をどう捉えるか？

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

島蘭 進 (しまぞの すすむ)

Profile — 島蘭 進

東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。筑波大学哲学思想学系研究員、東京外国語大学助手・助教授を経て現職。(財)国際宗教研究所長、宗教者災害支援連絡会代表。専門は宗教学、死生学。著書は『現代救済宗教論』(青弓社)、『精神世界のゆくえ』(東京堂出版/秋山書店)、『現代宗教の可能性』(岩波書店)、『時代のなかの新宗教』(弘文堂)、『ポストモダンの新宗教』(東京堂出版)、『「癒す知」の系譜』(吉川弘文館)、『すべて単著』など。



新しいスピリチュアリティと心理学

スピリチュアリティは広い意味での宗教を人間の側の特性に即して捉えようとする言葉だ。人間の統御できるものを超えた、聖なるものと関わるような、人間の経験や資質や特性を指すものだ。日本語では中世に遡る「靈性」の語が最も近い意味を担っており、鈴木大拙の『日本の靈性』¹はスピリチュアリティの語を強く意識したものだ。

「宗教」は各人の事柄であるとともに外部にあるシステムをも指すのに対して、スピリチュアリティは主に個人の内部において、あるいは個人を通して見出されるものとみなされてきた。この意味でスピリチュアリティの語は、そもそも心理学と関連が深い。宗教が個人の心理に関わる事柄として経験、観察されるような機会が増えてくる。個人が自らの宗教経験を心理的な出来事として捉え、叙述するような態度を好むようになる。回心体験・神秘経験に注目したウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』はその先駆的な現れだ。ジェイムズは宗教をスピリチュアリティから、つまりは個人心理の側面から捉えようとしたといえるだろう。

宗教とスピリチュアリティは密接に関わりあっており、同じ事柄をシステムに力点を置いていうか、個人に力点を置いていうかの程度の差ともみなせる。宗教のあるところには、常にスピリチュアリティはあったといえる。だが、安定した宗教の存在が前提とされ、多くの人々が

同一の宗教を共有していると考えられていたときには、スピリチュアリティについて語る必要性はさほど感じられなかった。せいぜい少数のひいでた資質をもつ人々に関わる用語として用いられるにとどまっていた。

ところが、20世紀、とりわけ20世紀の最後の四半世紀になって、宗教とは独立したものとしてスピリチュアリティを捉える考え方が広がってきた。「新しいスピリチュアリティ」(新靈性)とよべる新たな運動や文化形態(新靈性運動・新靈性文化)だ²。アメリカのニューエイジや日本の精神世界、またグリーンワークの集いやセルフヘルプ・グループの広がり、こうした新しいスピリチュアリティの例だ。

新しいスピリチュアリティにおいては、宗教と独立にスピリチュアリティがあり、それこそ近代人にふさわしいものだと考えられることが多い。たとえば、自らの死に向き合うこと、死者との心的交流を行うことに多くのエネルギーを割きながらも、来世での救いというような伝統宗教の教えには納得しないという人がある。宗教が教えてきたような心の深層の体験は、今や心理学や心理療法がよりの確に捉えていると考えて、心理学や心理療法を通して自己超越の道を歩もうという人がある。こうした人たちは、もはや伝統的な宗教にはついていけないと感じているが、スピリチュアルな関心は強くもっており、「自分は宗教的ではないが、スピリチュアルだ」と考えている。

新しいスピリチュアリティにおいて心理学や心理療法的な大きな位置を占めているという事態を、臨床心理学や心理療法的な諸潮流における宗教やスピリチュアリティへの関心という観点から見直してみよう。精神医学系の心理療法（精神療法）の歴史をたどると、その当初から宗教やスピリチュアリティへの関心は高い。欧米にはルートウィヒ・ビンズワナー、メダルト・ボス、ヴィクトール・フランクルなどがあり、日本では呉秀三や森田正馬がいた³。また、ジークムント・フロイトやカール・グスタフ・ユングの心理学を「力動精神医学」とよんで総括的な歴史像を提示したアンリ・エレンベルガーは、その過程を宗教的な心理療法から精神医学的・心理学的な心理療法への移行と捉えている⁴。

スピリチュアリティこそが心理療法的な核心的問題だと考えている心理学派は、1970年代以来発展してきたトランスパーソナル心理学だ。だが、それに先だって人間性心理学の運動があった。ユングとともにその先駆者とされているアブラハム・マズローは人間性心理学の中心的な学者の一人とみなされている。スピリチュアリティへの関心は、エーリッヒ・フロムやゴードン・オルポートら人間性心理学の他の学者にもかなりみられた。幼児期の母子関係に注目するエリック・エリクソンのライフサイクル論やウィニコットの対象関係論は精神分析的な心理学の内から人間性心理学に近づく動きであるとともに、スピリチュアリティへの関心を深めていくもう一つの道筋でもあった。

死や喪失とスピリチュアリティ

心理学とスピリチュアリティが密接な関連をもつようになる回路となるのは、①宗教、②心理学だけでなく、さらに③医療という、20世紀から21世紀へとますます巨大化していく知の領域がある。ひとつは「癒し」に関わるもので、ホリスティック医療の主張はその代表的なものだ。代替医療や気功のような西洋近代医学の外から発展してきた医療や癒しの文化において、またサイコオンコロジーのように近代医学の枠内から発展し、心理的な癒しの機能を評価

しようとする潮流において、スピリチュアリティは大きな論題とされてきた。

心理学とスピリチュアリティの密接な関連が、医療の新たな展開の中から求められてくる、もうひとつの領域は死に関わるケアの領域だ。緩和ケア・終末期ケア・グリーフケアは密接に関わりあった領域だが、1970年代以来、急速に世界に広まっていった知と実践である。そしてそこで心理学的な側面はきわめて大きな要素を占めている。死に行く人がどのような心理状態にあるのかを探求した、エリザベス・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』（原著: *On death and dying*. 1969年）⁵が及ぼした衝撃を考えてみよう。そこで見出されたものの一つは、その後、「スピリチュアル・ペイン」とよばれるようになるものだ。

その後、展開していく欧米のDeath Studies、Thanatologyや日本の死生学・他の東アジア諸国の生死学において、死に向き合う心にどのようなケアをなしうるかという問いは中核的な位置をもっている⁶。死に行く人や近い人の心のケアとともに、死別の悲しみに沈む人のケアも大きな課題となっていき、悲しみや喪失の心理と心理療法についての科学的な知や実践が急速に拡大していった。もともと死別の悲しみを和らげる働きをもっていたのは近い人の共同性やそうした共同性に支えられた儀礼や習慣的行為だった。通夜や新盆で死者の臨在を感じながら読経に耳を傾け、ともに飲食しつつ語り合うことは、喪失に苦しむ人たちにとって大きな支えとなったことだろう。

しかし、そのような共同体的な支えは、70年代以降、急速に弱まっていった。伝統的な宗教儀礼に対する違和感も広がっていった。日本では葬儀や墓について、これまでのやり方では満足できないと感じる人が増大した。自然葬や樹木葬や、個人で入ることができる永代供養墓などが増えてきた。葬儀では心が慰まないので、葬儀が簡略化していく傾向も目立つようになった。こうした共同性や伝統的な文化様式の後退と心理的なケアのニーズの増大とに深い関係があるのはみやすいところである。

スピリチュアリティの興隆をどう捉えるか？

死や死別をめぐって心理学的な要素が入り込み、宗教からスピリチュアリティへの移行が進むという事態は、チャプレン制の変容という形で露わになってきている。かつて欧米の病院のチャプレン⁷は特定宗教・特定宗派の立場から、苦しむ者、悲しみに心ふさがれた者のために、また彼らとともに祈りを捧げることが主な役割だった。だが、今では患者自らが対応できる特定宗教・特定宗派に属すると期待することはできないのがふつうになりつつある。また、祈りを捧げるとともに、それ以上に、寄り添い話を聞くこと（傾聴）が重要だと認識されるようになった。かつてのチャプレンに期待されたパストラルケアから、より心理学的な側面の多いスピリチュアルケアへの変容が進行している。

スピリチュアルケアはチャプレンにだけ求められるのではない。日本のように病院にチャプレンが居ないのがふつうである国ではとくにそうだが、医師や看護師やソーシャルワーカー、あるいは在宅ケアに関わる介護士もスピリチュアルケアに携わらざるをえなくなる。また、日頃の経験からスピリチュアルケアへの関心をもっている人が多い。医療現場において、スピリチュアリティへの関与という形をとって心理学的な思考法や実践形態が広まっていきつつあり、今後、さらに広まっていくことが予想されるのだ。

スピリチュアリティと伝統宗教

— 歴史的な展望

現在、興隆しているのは「新しいスピリチュアリティ」だけではない。伝統的な宗教の内部でも、「スピリチュアリティ」について語られる機会が増えている⁸。キリスト教の伝統では「霊」(spirit)と「物質」(matter)といった対立項が早くから形作られており、それにのっとった「霊的」(spiritual)という用語は広く用いられてきたが、それは個人の事柄としての「スピリチュアリティ」という用法とは直接結びつかない。

現在用いられているような意味でのスピリチュアリティの語の用法は、17世紀のフランス

で神秘主義(mysticism)の語と相通じるものとして用いられるようになったのに始まるとされる⁹。そこではスピリチュアリティとは修道院において典型的に見出されるものである。修道士の修道生活のような特別の修練を通して個人のうちに養われるものをスピリチュアリティとよぶこの用法は現代でも一定の力をもっており、たとえば日本の禅宗僧侶と欧米のカトリックの修道士・修道女の間で修行を体験しようという試みが1979年より積み重ねられてきており、「東西霊性交流」とよばれている。

だが、やがてキリスト教組織の中でも、修道院のように世俗生活を離れた特殊な環境でこそ養われるものとしてではなく、一般信徒の日常生活にも深く関わるものとしてスピリチュアリティの養成が問われるような時代がやってくる。スピリチュアリティは限定された数の宗教的達人の事柄ではなく、すべての信徒の内面に関わることと意識されるようになってきたのだ。それは1950年代から60年代にかけてのことだとされる¹⁰。信徒はもっぱら聖職者の指導を受け、あるいは聖書に記された神聖な言葉に従い、「信仰」をもつべき受動的な存在であるという考え方から脱し、信徒自身が自らスピリチュアリティ(霊性)を養うという考え方に基づいて、スピリチュアリティが自覚されるようになり、スピリチュアリティの語の新たな用法が広がっていったのだ。

もっともそういう意味での信徒の陶冶・養成は、実際にはスピリチュアリティという語を用いずに、以前からあまり意識されずにさまざまになされていたはずで、個人の多様性や自発性を尊びながら、それらを新たに再構成し発展させながら、スピリチュアリティという語で指し示すようになったわけである。したがって、これはキリスト教のスピリチュアリティの再構成、再概念化が進行しているとみるべきだろう。特定の宗教伝統に属しその信仰を保持しながら、かつそれぞれに固有の事柄としてスピリチュアリティを尊ぶ人々が増えている。これは「新しいスピリチュアリティ」とは区別されるべきものであるがそれと密接に関連しあってお

り、現代におけるスピリチュアリティの興隆現象の一環をなす事柄である。

このように宗教とスピリチュアリティの関係は単純ではないが、宗教とスピリチュアリティが別々のものであるわけではない。キリスト教という宗教の中でもスピリチュアリティに関わる言説が興隆しているのだが、既存の宗教組織の外部で展開している新しいスピリチュアリティが目立つのも確かである。では、それは宗教以外の何かとすべきだろうか。そう考えるのは、宗教の語を狭く限った用法であって、多様な宗教の形態を比較する道を閉ざしてしまうだろう。

「宗教」はシステムの側面からみており、「スピリチュアリティ」は個人の経験や資質や特性の側面からみているが、ともに「聖なるものとの関わり」をめぐる事柄である。かつてはシステム性が目立つ現象だったのが、今は個人性が目立つ現象になってきた。だが、変化してきているとはいえ両側面は常にみられるので、宗教のあるところにスピリチュアリティはあり、スピリチュアリティのあるところに宗教はある。だから、新しいスピリチュアリティも広い意味での宗教の内側に含まれる。自らが「宗教」に関わっていると規定されることを好まない、新しいタイプの宗教のあり方が広がってきているとみるのがよいだろう。

そしてその新しいタイプの宗教は心理学的な態度や思考法と親和性が高いのだ。キリスト教や仏教の中でも心理学的な態度を交えて信仰生活をわがものとしていこうとする人々が増えている。その意味で、スピリチュアリティという語が頻用されるようになってきている事態は、宗教が心理学的側面を強めていることの表れとみることもできるだろう。

文献と注

- 1 鈴木大拙 (1944/1972) 『日本の靈性』大東出版社／岩波文庫
- 2 島蘭進 (1996) 『精神世界のゆくえ：現代世界と新靈性運動』東京堂出版。同書の新版は、島蘭進 (2007) 『精神世界のゆくえ：宗教・近代・靈性』秋山書店
島蘭進 (2007) 『スピリチュアリティの興隆：

新靈性文化とその周辺』岩波書店

Shimazono, S. (2004) *From salvation to spirituality: Popular religious movements in modern Japan*. Melbourne: Trans Pacific Press.

- 3 島蘭進 (2003) 『「癒す知」の系譜：科学と宗教のはざま』吉川弘文館
- 4 Ellenberger, H. F. (1970) *The discovery of the unconscious: The history and evolution of dynamic psychology*. New York: Basic Books. [エレンベルガー・H. F.／木村敏・中井久夫 (監訳) (1980) 『無意識の発見：力動精神医学発達史』上・下、弘文堂]
- 5 Kübler-Ross, E. (1969) *On death and dying*. New York: Macmillan. [キューブラー・ロス・E.／鈴木晶 (訳) (2001) 『死ぬ瞬間：死とその過程について』中公文庫]
- 6 島蘭進・竹内整一 (編) (2008) 『死生学1 死生学とは何か』東京大学出版会
- 7 教会や寺院に属さずに、施設や組織で働く聖職者のこと。
- 8 島蘭進 (2007) 「新靈性文化と宗教伝統」島蘭進『スピリチュアリティの興隆』第I部第三章。
Shimazono, S. (2002) New spirituality culture and religious tradition. In R. Bachika (ed.) *Traditional religion and culture in a new era*. London: Transaction Publishers. を参照。
また、ロバート・ウスノー、クラーク・ルーフ、メレディス・マクガイアなどのアメリカの宗教社会学者は早くからこの見方に立って調査研究を行ってきている。
Wuthnow, R. (1998) *After heaven: Spirituality in America since the 1950s*. Berkeley, Calif: University of California Press.
Roof, W. C. (1993) *A generation of seekers: The spiritual journeys of the baby boom generation*. HarperSanFrancisco.
Roof, W. C. (1999) *Spiritual marketplace: Baby boomers and the remaking of American religion*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
McGuire, M. (2008) *Lived religion: Faith and practice in everyday life*. Oxford: Oxford University Press.
- 9 Carrette, J. & King, R. (2005) *Selling spirituality: The silent takeover of religion*. London: Routledge.
McGrath, A. E. (1999) *Christian spirituality: An introduction*. Oxford: Blackwell Publishers. [マクグラス・A. E.／稲垣久和・岩田三枝子・豊川慎 (訳) (2006) 『キリスト教の靈性』教文館]
- 10 Carrette and King, 前掲注9。